HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本と中国におけるジオツーリズムの発展に関する地理学的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	肖, 錕
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13415号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74361
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Xiao_Kun_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　肖　錕（ショウ　コン）

学位論文題名
日本と中国におけるジオツーリズムの発展に関する地理学的研究

・本論文の観点と方法

ジオパークは、地球をテーマにした自然公園の一つであり、珍しい地形や地質などが観光資源となっている。日本でもユネスコの世界ジオパークに認定された地域が増えており、世界遺産と並んで国際的な観光地として注目されるようになってきた。ジオパークにおいて、環境保全や教育などを主目的に提供されるのがジオツーリズムである。本論文は、日本と中国のジオパークを事例として、ジオパークにおけるジオツーリズムの発展要因と今後の課題を、人文地理学的な視点から解明したものである。

研究の方法として、筆者は、まず既存の文献や法制度に注目して、ジオパークに関連する用語や法律の整理から始めた。次に、日本と中国の現地調査から得られた資料を分析した。現地調査の内容は、景観観察に加えて、ジオパークの職員、ジオジーリズムのガイドへの聞き取り調査のほか、観光客と地域住民へのアンケート調査である。具体的な対象地域は、日本では最初に制定された糸魚川ジオパーク（新潟県糸魚川市）と、調査時点では最も新しいジオパークであった苗場山麓ジオパーク（新潟県津南町・長野県栄村）である。中国においても同様に、最初の世界ジオパークとなった石林ジオパーク（雲南省）と、設立されてまもない五峰ジオパーク（湖北省）を取り上げる。

・本論文の内容

本論文は9章で構成される。第1章（序論）では、これまでのジオツーリズムに関する研究の問題点が整理され、人文地理学の視点からジオツーリズムを研究する意義が検討される。

第2章では、ジオツーリズムに関連する従来の研究の分析と、ジオパークに関連する用語が定義づけられる。日本・中国共に、2010年代からジオツーリズムを扱った研究が増加している。当初は地質学、資源科学、自然地理学などの自然を扱った分野で多かったが、最近は、人文地理学、観光学、地域開発学など、人文学を含めた多くの分野で扱われるようになってきた。日本で最初にジオパークを扱った論文は2005年に発表された『ジオパークと地質遺産の保全・活用』であったが、中国では、すでに1989年に『龍門山の観光資源評価及び国立地質公園建設の想定』が発表されており、ジオパークの整備に対して先見の明があったといえる。

第3章は、日本におけるジオパーク研究のテキストマイニング分析である。ジオパークとは、「地球」と「公園」を組み合わせた造語である。ジオパークに関して、従来の研究では、ジオツーリズム、ジオガイド、ジオストーリー、ジオサイト、ジオツアーなどの様々な用語が使われてきた。そのことは、多様なニーズに対応したツアーを提供すのには適しているものの、用語の意味があまり整理されていないため、観光客には理解が難しいという欠点があることが指摘された。

第4章で取り上げる新潟県糸魚川市は、もともと知られた観光地ではなかったが、フォッサマグナ（大地溝帯）の西端となる糸魚川・静岡構造線により、地理や理科の教科書で取り上げられてきた。その知名度を生かして、1990年代からジオパークという言葉を使って観光地化を進めて

きた。2008年には、北海道の洞爺湖・有珠山やアポイ岳などと同時に、日本初の世界ジオパークに認定された。糸魚川ジオパークには、様々な団体が毎年視察に訪れており、日本におけるジオパーク設立のモデルになっている。そのジオツーリズムは、地質資源だけに偏ることなく、地域の歴史や文化的な内容も含めたジオストーリーに特徴がある。その一方で、交通の利便性が悪かったり、ジオパークの商品がブランド化されていないなどの課題も指摘された。

第5章で取り上げる苗場山麓ジオパークは、苗場山の北麓、中魚沼郡津南町と下水内郡長野県栄村にまたがる。苗場山麓ジオパークは、信濃川の河岸段丘や、その支流に見られる柱状節理、マンモスの化石などをテーマとして、2014年に日本ジオパークに指定された。そのジオツーリズムの特徴は、ガイドや環境教育の面で地域住民との繋がりが強く、ジオパークそのものが地域活性化に結びついていることにある。しかし、まだ知名度が低いことや（有名な苗場スキー場は苗場山から10km以上も離れている）、宣伝が不十分であること（駅や空港に案内がないことや、英語でのネット配信もない）、また中国と比べて国レベルの支援が十分でないことなどの課題も指摘された。

第6章は、中国のジオパーク整備に関わる法制度の分析である。2018年時点で142か所ある世界ジオパークのうち、中国に最多の37か所が分布している。中国のジオパークは、世界ジオパークだけでなく、国家ジオパーク、省ジオパーク、県・市ジオパークに分類され、それらの総数は190か所を超える。ジオパーク以外にも3,000 か所以上の地質的遺構が保護されており、そこに127の博物館が建設され、21,000の解説板か取り付けられている。このように中国では、国や地方行政が主体となってジオパークを設立・維持してきたが、ジオパーク専門の法律（例えば日本の自然公園法のようなもの）がないことや、ジオガイドを育成する制度を充実する必要があることなどの課題が示された。

第7章は、中国南西部の雲南省に位置する石林ジオパークの事例である。ユネスコは2004年に世界初のジオパークとして20地域を認定したが、この石林ジオパークを含めて、そのうち8つが中国のものであった。現地調査で著者は、職員への聞き取り調査と、ジオパークを訪れた観光客に対してアンケート調査を実施した。石林ジオパーク（Stone Forest Geopark)は、奇岩が林立するカルスト地形が観光資源であり、とりわけ観光客を惹きつけるのが、少数民族イ族の少女アシマが変化したと伝えらえる巨岩であり、ユネスコのホームページの背景にも使われている。このような有名なジオパークは政府が主体的に運営しており、地域住民によるジオパーク活動への参加が少ないことは問題であると指摘された。

第8章は、長江中流域の湖北省に位置する五峰ジオパークの事例である。五峰は2011 年に湖北省地質公園となり、2017 年に国家地質公園に指定された。新しいジオパークであり、日本語や英語による情報は少ない。著者は、五峰のジオパークの職員に対する聞き取り調査と、地域住民へのアンケート調査を通して、ジオツーリズムの特徴と運営の課題を考察した。五峰ジオパークは、カルスト地形の奇岩や洞窟、古生代の地層がむき出しになった大渓谷などが観光資源となっている。しかし、交通の利便性が悪いこと、宿泊施設が不足していること、地域住民の高齢化や過疎化などが問題となっている。さらに、ガイドを育成する制度が無いこと、運営と宣伝の資金が不足していること、関連する複数の団体の連携ができていないという問題も指摘された。一方で、他の地域ではほとんどとみられない、製茶業という地域文化を巡るジオツーリズムのあり方を検討すべきであるとの提言がなされた。

第9章（結論）では、本論文の問題意識と理論的枠組み、各章の知見をまとめ直している。